

研究課題	8年間の海外交流校（インドネシア）と作り出す国際フリーペーパー
副題	～グループスキルとネットワーク活用による国際協働学習モデルの構築を目指して～
学校名	早稲田大学本庄高等学院
所在地	〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3
ホームページアドレス	<a href="http://www.waseda.jp/honjo/honjo/index.html">http://www.waseda.jp/honjo/honjo/index.html</a>

## 1 研究の目的

本研究は、8年間の交流実績のある日本とインドネシアの高校生が過去の協働学習の経験を生かし、通年の密度の濃いプロジェクトに取り組むことで、グローバルなコミュニケーション能力を育てることを目的とする。

## 2 研究の背景と動機

早稲田大学本庄高等学院（以降、早稲田と表記）とジョグジャカルタ第2高校（以降、ジョグジャと表記）は、毎年8月に日本福祉大学で行われる国際交流プログラム World Youth Meeting（以降、WYM と表記）において、2003年以来協働で英語プレゼンテーションを行ってきた。WYM コミュニティーの応援に支えられて毎年一定レベルの成果を発表してきたが、2校間の交流経験はその場限りで終わり、両校にとっても WYM コミュニティーにとっても知見の蓄積と共有がなされていないと感じていた。せっかくの8年の交流をさらに活かすために通年の実践研究に取り組み、プロジェクト型の国際交流プログラムに求められるものを再考してみようと思いついた。

「雑誌」作りに着目した主な理由は、①フリーペーパーという新しいメディアへの生徒の関心の高さ ②執筆・編集という作業の教育効果の2点である。デジタルメディアが日に日に隆盛になるとはいえ、高校生にとって紙媒体が一番身近なものだ。成果が形に残るというだけでなく、フリーペーパーを作る、という行為自体がおしゃれなものとして受け取られており、熱意を持って取り組むことが期待できる。雑誌作りの過程自体も総合学習（他者のために書くという言語使用の経験、隠れたものを引き出して新たな価値を加えるという思考過程、読者の反応を予想して効果的な情報を発信するという経験）といえる。さらに、両国の読者に喜ばれる誌面作りを目指すことで、両校生徒が対等な立場で作業をする場が設定できると考えた。

## 3 期待される成果

本実践の計画時に期待した成果は以下のものである。

### ▶有形の成果

(1) フリーペーパータイプの英語雑誌（以降 FP と表記）： 8月と3月に発行。A4 版カラー8ページ。内容は生徒が合議で決定。WYM2011 の発表テーマとリンクさせるように促す。FP no.2 には記事とリンクさせたビデオクリップを作成し、DVD で配布する。

(2) 指導用ハンドアウトまたは資料集：モデル表現集やフリーペーパー・雑誌の基本フォーマット資料など、必要に応じて作成。

▶無形の成果

(1) 異文化(他者)理解：密度の濃いプロジェクトでは様々な局面で正と負の感情を経験する。対処の仕方を学ぶことで、国際化時代の「協働」のあり方を体験する。

(2) 活動プロセスの明確化；特にグループスキル、ICT活用スキル、タイムマネジメントを学ぶ。

## 4 実践の記録

本実践は通年のプロジェクトだが、活動内容から以下のように大きく3期に分けられる。

第1期(4月～7月中旬)：実践開始からFP no.1 完成まで

第2期(7月末～8月)：パートナー来日、WYMでの共同成果報告と直後の交流

第3期(9月～3月)：FP no.2 企画開始から完成まで

この稿では各期の事前計画と実際の展開を対比させ、教員と生徒それぞれの動きの経過を報告する。

### 4.1 参加者

【教員】 ジョグジャは Tri Indaryati 先生(英語科)が中心となり、日本語科と情報科の教員が支援した。早稲田は筆者(英語科)が中心となり、英語科と情報科の教員が支援した。 【生徒】 ジョグジャは5人の高3生が通年で参加したが、早稲田は高3生が5人、高2生7人、高1生3人の計15人が関わった。ジョグジャが Tri 先生を中心に学校側で通年参加を前提に選抜したメンバーなのに対し、早稲田側は ESS(英語クラブ)部員の有志である。早稲田側は高3生が8月で部活動を引退するため、それぞれの時期でメンバーが若干入れ替わった。

### 4.2 第1期(4月～7月中旬)

#### ▶4月の計画：メンバー募集、年間シラバス案提示

【教員】 Tri 先生は適任の生徒を4人選抜、筆者は ESS 内で説明会を開いて有志を募ると同時に、WYM2011 の大会テーマ “21<sup>st</sup> century skill”を両校に伝達した。 【生徒】 早稲田生徒は「フリーペーパーを発行する」という企画に強い興味を示し、10人ほどが関わる意思表示をする。このプロジェクトと WYM との関連づけが把握しにくいようだ。

#### ▶5月の計画：両校生徒間のやりとり開始、誌面構成確定

【教員】 Tri 先生からインドネシアのティーンズ雑誌の誌面写真が届く。ジョグジャメンバーに書かせるべき記事の申し出があったので、生徒間の相談を待つように依頼。双方の年間学校行事予定を共有。筆者から、早稲田側のミーティングの様子を Tri 先生とジョグジャメンバーに写真付きで送信する。外部講師の人選を早稲田の同僚に依頼。 【生徒】 Email で双方の自己紹介の交換が始まり、ジョグジャメンバーの英語の表現力が秀逸なことを知る。早稲田からは IT 環境と使い方を問い合わせる。5月末にはジョグジャからインドネシアの結婚式についての長文の記事が送られてきた。

#### ▶6月の計画：外部講師の講義、WYMの中間報告会

【教員】 WYM プレミーティング用にパンフレット原稿とメンバーの集合写真の送付を依頼。参加への意気込みに満ちた原稿を書いたくれたので、そのスタイルを生かしたものを両校のパンフレットページとして提出する。長文の記事2本を Tri 先生から受領。外部講師の講義には早稲田の同僚も参加。 【生徒】 Facebook に

“freepaper project”のグループを作り、両校間でやりとり開始。自己紹介開始1週間後に誌面構成の相談を Facebook 上で始めている。早稲田側では6月8日に週刊朝日の河野正一郎副編集長をお招きし、雑誌誌面の作り方を教わった。6月14日には早稲田大学社会科学部の花光里香准教授に異文化間コミュニケーションのワークショップを依頼。FP メンバーと有志、計16人が参加した。

▶7月の計画：FP 入稿、WYM 準備、来日準備

【教員】 両国間では来日準備ためのやり取りが主だった。レイアウト指導や英文校正で同僚に支援を依頼。

【生徒】 7月15日に入稿することになり、早稲田側の学期末試験終了後の9日から作業が加速した。ジョグジャから13ページの記事が送られてきて、誌面や作業進行のイメージが依然としてあることを認識。Facebook、email、Skype を使い分けながらの集中作業、大学院留学生を招いての英文校正作業を経て入稿。完成の興奮状態でジョグジャのメンバーとFacebookでチャットし、落ち着いたところでWYM参加メンバーに経験談を伝えていた。

#### 4.3 第2期(7月末～8月)

▶7月末の計画：WYM 準備

【教員】 来日準備のやり取りが主だった。【生徒】 FP 編集から学んだ ICT の使い分けについて WYM で共同発表することにし、編集メンバーに取材するなど準備を進める。FP が納品され大喜び。食い入るように読む。

▶8月の計画：ジョグジャメンバー来日、共同発表と交流

【教員、生徒】 WYM 主催校の日本福祉大学(愛知県)でジョグジャチームと対面、完成した FP を手渡しする。共同発表は、「個々の ICT の特徴を把握し、ニーズに応じて使い分けるのが21世紀に求められるスキル」という趣旨になった。FP を WYM 参加校に配布。読者アンケートも一緒に配ったが、回収方法に無理があり、アンケートの反応はなかった。WYM 終了後にジョグジャメンバーと一緒に新幹線で東京へ。

翌8月9日は終日の交流日になった。午前には早稲田大学近くのカフェで早稲田メンバーと合流し、FP no.2 の打合せをした。WYM には参加しなかった FP メンバーはここではじめてジョグジャのパートナーと対面。

打合せの席で、早稲田メンバーは8月で入れ替わるがジョグジャメンバーは交替しないことを初めて知る。昼食後にジョグジャ生徒の希望で秋葉原と渋谷に寄り、渋谷のファミレスで夕食会。来日できなかったジョグジャのメンバーにメッセージを託す。ジョグジャメンバーは翌日成田から帰国した。

#### 4.4 第3期(9月～3月)

▶9月の計画：FP no.2 の企画相談開始

【教員】 Tri 先生のご家庭にご不幸があり、お悔やみの気持ちを伝える。FP no.1 を70部ジョグジャに発送、早稲田の新編集チームメンバー募集のため学内広報。【生徒】 早稲田側は3年生が引退し、8月に交流会に参加した2年生が新リーダーになる。2冊目の編集メンバーは学内公募という計画だったので公募はしたが、集まった新編集メンバーは全員が ESS 部員だった。2冊目のテーマを「大切なもの」にしてはどうかという提案を Facebook で月末に発信する。DVD 企画は本誌の内容の決定後ということで保留。

▶10月の計画：DVD 作成、外部講師による指導

【教員】 両校間では特になし。早稲田メンバーに対しては FP no.1 では特に協働製作が感じられるページが評判がよかったことを伝える。外部講師による講義はデジタル英語教材作成に詳しい大学教員への依頼を考えていたが、お招きできる段階ではないので断念する。【生徒】 新メンバーが Facebook で自己紹介を登

信。10月前半は週1回のミーティングで誌面構成の案を整理。協働製作であることをFP no.1よりも強くアピールできる誌面を目指す。後半は中間試験と月末の文化祭準備のため活動は休止状態。Facebookでの発信も停滞気味になり、ジョグジャメンバーが状況を尋ねている。

#### ▶11月の予定：FP no.2の企画を固める

【教員】両校間では特になし。活動も生徒に任せている【生徒】文化祭の終了後、誌面構成についてのチャットの提案がFacebook上で何回か発信される。ジョグジャ側は大学受験が近くなって、時間を合わせにくくなっている様子。11月後半は早稲田側が期末試験準備のため休止。

#### ▶12月の予定：SSH報告会で掲示、WYMコミュニティに中間報告

【教員】両校間では特になし。筆者がFacebookのグループに加わる。【生徒】期末試験終了後にFacebookでの発信再開。サンプル写真付きの具体的な取材依頼を早稲田メンバーがアップ。アイドルグループJKT48についての原稿依頼に対し、ジョグジャ側がもっと人気のある他のアイドルグループを挙げるなど、活発で詳細なやりとりが見られる。

早稲田側は月末にSSH企画の大きな学術国際交流イベントSEESがあり、FPメンバーのほとんどが有志のサポートスタッフとして参加している。WYMのいわば台湾バージョンであるASEPに向けて中間報告を考えていたが、生徒の様子ではレポートを取りまとめる余裕があるとは思えなかったため要求をやめた。SEESの終了後、サンプルページをFacebookにアップしてのやりとりをしている。

#### ▶1月の予定：入稿を視野にいれて誌面編集

【教員】両校間では特になし。Facebook上のやりとりで早稲田メンバーが苦慮している様子なので初めて介入(発言)。【生徒】引き続き編集作業。誌面はだいぶ形になってきた。短い記事を集めて構成するページが増えたので、抜けている写真や記事の督促やレイアウトに取り組んでいる。DVD用ビデオクリップの台本作成分担を早稲田メンバーが相談。

#### ▶2月の予定：入稿を視野に入れて誌面編集

【教員】Tri先生から、FPとWYMのことが市内で評価を受けているとのメール。今後の作業予定を簡単に伝える。入稿直前は同僚と共に編集作業を支援。留学生に協力依頼。【生徒】早稲田側の卒業式での配布から逆算し、入稿日を2月18日と決めてジョグジャに伝える。ジョグジャメンバーから表紙の案が送られてきた。背景がパティックで美しいのだが、協働製作の印象が減ってしまうので、早稲田メンバーは改訂の申し出を苦慮しながら発信する。留学生による英文チェックを経て18日に入稿。早稲田側は学年末テスト期間で活動は休止。

#### ▶3月の予定：FP no.2完成、関係者に配布、振り返り

【教員】ジョグジャに完成品150部と各ページをA1サイズに拡大印刷したポスターを郵送。拡大版コピーは大変喜ばれた。DVD製作予定について両国間でやりとり。【生徒】早稲田の卒業式の日納品。関わった3年生への配布の手配をする。早稲田側では新校舎への引っ越し作業のため思うようにメンバーが集まらないが、DVD用にサンプルビデオクリップを撮りはじめる。現在も両校で作業を継続している。

## 5 成果について

### 5.1 有形の成果

#### (1) FP no.1, FP no.2

計画通り、2冊の「フリーペーパー」を発行することができた。ジョグジャのメンバーの英文を書く力量は素晴

らしく、ページ数と誌面作成の趣旨から掲載できないのが残念だった。また、誌面デザインも早稲田側とはテイストが異なり、新鮮な印象を受ける。早稲田メンバーはフリーペーパーという媒体を見慣れていること、必須科目の「情報」の授業でイメージ通りの誌面を作成するための技術をひとつと経験していることで、完成度の高い誌面を作成できた。

週刊朝日の河野副編集長による講習では、「何を読ませるかだけでなくなぜそれを読ませたいかを盛りこむ」「発行日の季節とマッチするデザインを」等のノウハウを教えていただいた。「なぜ」の提示はまだ十分とは言えないが、日本の季節(夏と早春)に配慮したデザインにはなっている。

No. 1 と no.2 で大きく異なるのは、2冊目では協働製作の印象を強く打ち出し、また表紙に盛りこむ情報を増やしたことだ(写真1~3)。また8月の対面交流で雑誌やフリーペーパーのイメージが共有できたため、no.1 で起こってしまったレイアウト案の行き違いは no.2 では起こらなかった。



写真1 FP no.1 表紙



写真2 FP no.2 表紙



写真3 FP no.2 pp.2-3

(2) WYM2011 での協働発表コンテンツ FP no.1 の編集経験を両校で持ち寄り、「対面、ビデオ会議、email、SNS、チャット等の特色を知り、状況に応じて使い分けること」の重要性について発表をまとめた。同じICTを使っても使い方の違いでギャップが生じる。ICTがあれば情報のスムーズなやりとりが保証されるわけではなく、相手と自分がICTをどう使うかも念頭に置く必要がある。作成過程での失敗と成功の経験から学んだこのノウハウを、寸劇も織り込んで発表した。この発表のビデオはWYM2011の公式サイトから閲覧可能である。( <http://www.japanet.gr.jp/> )

(3) facebook 上のやりとりの記録 どの時期にどのような交信が行われていたかの貴重な記録になる。両校生徒は原稿のやりとりは個人間のemailや個人のfacebook宛に行っており、すべてのやりとりが「閲覧」できるわけではないが、グループスキルの変化や、後述する英語力を推し量る上で貴重な記録になった。

## 5.2 無形の成果

(1) 両校メンバー間の親近感と相手への共感 パートナー校とは8年目の交流になるが、8月に対面した時の親近感は過去にはないものだった。合った瞬間から「あなたが〇〇だよ」と呼び合い、過去の交信からの印象と本人の印象のギャップの有無を楽しみながら、短時間で仲間意識が形成されていった。

第1期の成果および対面交流の効果は9月からの第3期にも波及した。8月に対面できたのは限られた人数だったが、対面したメンバーが親しげにパートナーの名前を口に出すことで、対面しなかった編集メンバーにも親しみが形成された様子だった。ジョグジャ側でも同じような変化が起きたことが、facebookの過去ログの口調から伺える。

(2) 行き違いや対立を受け止め対処する力 十分とは言えないが、逆提案をしたり大人の支援を具体的に求めたりするという、対処の経験値は上がってきている。今回の実践では第1期と第3期にそれぞれ1回ず

つ、大きな行き違いがあった。主に誌面の構成案をめぐる齟齬である。生徒たちがとった対処法は、交渉が必要な理由を可能な限り詳しく述べ、必要ならサンプルの写真をアップするなどが主だった。

**(3) 意図や情報をわかりやすく発信し受け止める力** FP no.2 の編集過程では、「こういうものをつくったらどうか」という写真付きの提案が目立って増えた。また前述(1)の親近感の形成が、受信した内容の行間を読み取って相手の状況を推測するのに役立っていた印象がある。

**(4) 英語でやりとりする意欲** ジョグジャメンバーの英語力は粒揃いだが、時間が経過するにつれ、発信者はより意欲的な2名に限定されるようになった。早稲田メンバーの英語力は英検3～准1級レベルが混在しているが、交信の回数は英語力ではなくリーダー的立場の強弱が影響している印象だった(1年生は熱心なメンバーでも facebook のグループサイトへの投稿はほとんどない)。

**(5) 協働企画を推進するためのグループスキル** 第1期は過去の協働学習(WYM の発表など)の経験値が高い3年生メンバーが推進役となり、連絡の手段選択やチームメイト間の情報の共有、タイムマネジメントの面で下級生のロールモデルになった。第3期は1, 2年生メンバーがそのロールモデルになんとか近づこうと模索していた。3年生メンバーの力量までは達していないが、教員側からのプッシュなしに定期的にミーティングと交信を行い、FP no.2 完成までもっていったのは成長といえよう。

**(6) 雑誌というメディアへの理解の深まり** 河野副編集による講習に加え、インドネシアやシンガポールのサンプルも含む、さまざまなスタイルの雑誌を比較できたのは貴重な経験だった。文章の中身、特に英語の見出しや記事の文体の検討は今後の課題である。

### 5.3 達成できなかったこと

**(1) FP no.2 と DVD 版の同時発行** DVD を作ることは両校で合意しているが、本誌の作成に手いっぱいとなり、同時完成まではこぎつけられなかった。

**(2) 教員作成の指導用資料** 英語の表現集は構想はしていたが、生徒間で教師による「矯正」を恐れずに交信を続けてほしいと意図したため、生徒側から支援のリクエストがあるまで干渉は控えた。Facebook の交信記録を今後さらに分析し、干渉しすぎない形の Tips 集作成を考えたい。

**(3) 学内、学外への十分な広報** プロジェクトチームとは進展や成果を共有したが、学校のホームページでの発信までには至っていない。Web での発信をためらっているのは、発信のメリットと肖像権や映像の転載などのリスクの把握が不十分だと自覚しているからである。リスクはきちんと把握した上で、メリットが得られるような広報の方法を検討したい。

**(4) 読者の反応の集約と誌面への反映** 8月の時点ではアンケート回収の工夫が不十分で、読者の反応は集約できなかった。Tri 先生からは、有形の成果物ができたこと自体がジョグジャ側では大好評だとの報告ももらっている。FP no.1 の完成時に、各ページを拡大印刷して早稲田の校舎内に掲示した。掲示から数カ月経っても立ち止まって読んでいる生徒が見うけられた。拡大して掲示するだけで、配布可能な媒体とはまた違った効果があることを再認識した。

## 6 考察と今後の課題

この項では一連の実践を振り返り、教員間の共通理解形成とプロジェクトを支える表現力(ここでは英語力)の2点から、本研究の意義と課題を論じる。

この実践はパートナーの Tri 先生の熱意なしでは成立しなかった。ジョグジャ校内の事情がどうであれ、Tri

先生が2009年から連続してWYM参加のために来日し、日本の状況の理解や関係者との親交を積極的に深めてこられたからこそ実践可能な企画だった。

教師間で協働作業の経験があると、個々の教育観は違っても、プロジェクト推進のためのシラバスの意図は共有しやすい。経験を独占せず広めていくことを意識さえすれば、推進役の教員が共通の経験を重ねることはプロジェクト型学習企画推進の力になる。

有形無形の成果を見直す作業を通して改めて意識したのが、参加者の英語の力量の重要性である。特にfacebookの過去ログから伺える表現力のばらつきは、編集作業の進行に様々な形で影響を与えていたと考えられる。前述したとおり、ジョグジャのメンバーは長文のレポートを英語で作成できる力量をもっていた。特に発言数が多い2人は流暢さと正確さで際立っており、自分の意図を短時間で表現できている。早稲田のメンバーは有志参加だけあって発信の意欲は素晴らしい。ただし英語で表現する力は個人差が大きく、用法と流暢さの力不足は本人たちも苦労している様子が見える。例を挙げると、依頼をする時の表現が“I want you to …”以外の表現が使えていなかったり、レイアウト案の詳細な説明に苦慮し、“This is the image of the page.”程度のメモにとどまったりしている。表現に迷って発信のタイミングを逃すこともあっただろうと推測される。ただし、第1期の過去ログを子細に追っていくと、早稲田メンバーの3年生リーダーの表現力が少しずつ伸びていっていることがうかがえる。必要に迫られて大量に発信をし続けた結果だと推測ができる。各学習者のレベルに応じて適切な支援をしていくことで、プロジェクト型学習で学力の伸長をはかる可能性も見出せる。

1年の実践研究を経験して、プロジェクト型国際交流で生徒と教師の双方を支えるのは言語による表現力だと改めて認識した。無形の成果物の伝達を大切にしつつ、FPやFacebookの過去ログを材料にして、企画を推進させるのに必要な表現力のレベルを再度検討していきたい。

パナソニック教育財団には貴重な実践研究の機会をいただき、心から感謝申し上げます。